

博士論文要旨

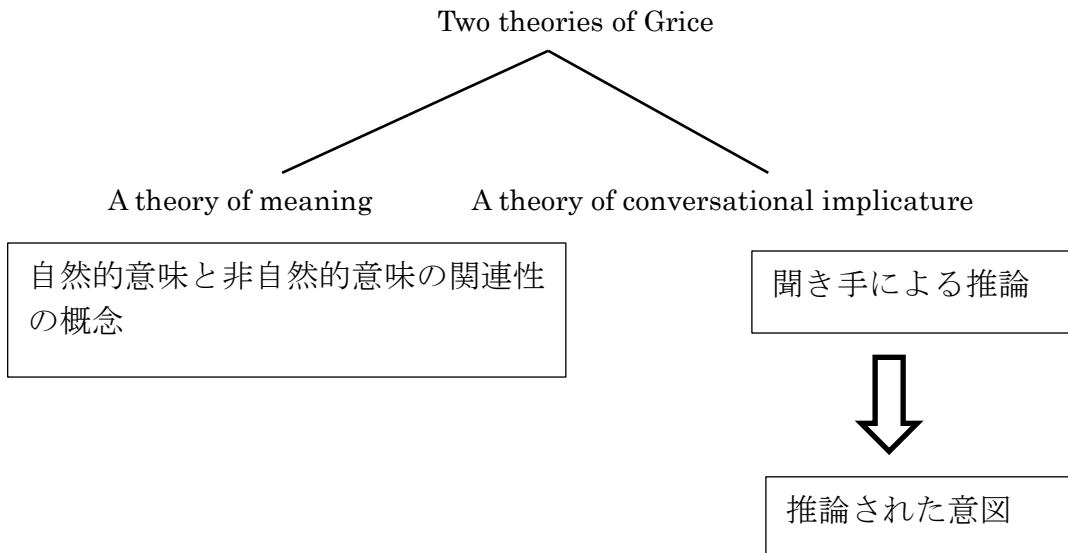
氏名 高 雅妃
学位の種類 博士（文学）
学位記番号 甲第 18 号
学位授与年月日 平成 28 年 3 月 17 日
学位授与の条件 神戸女学院大学学位規程第 5 条 1 項の規定による
学位論文題目 “Psychological Distance” as a Linguistic Primitive: Case Studies
in Korean in Contrast with Japanese and English

論文の要旨

字義的意味と発話での意味では同じ言葉でも差異がある。Levinson (1983)でも、字義的意味と発話での意味には差異があると述べているが、この差異に本研究では心的距離が影響を与えていると考え研究を行った。本研究ではすべての言語に心的距離が存在すると考え、心的距離が文法の語用論的特質の一つであることを証明することを目的とした。

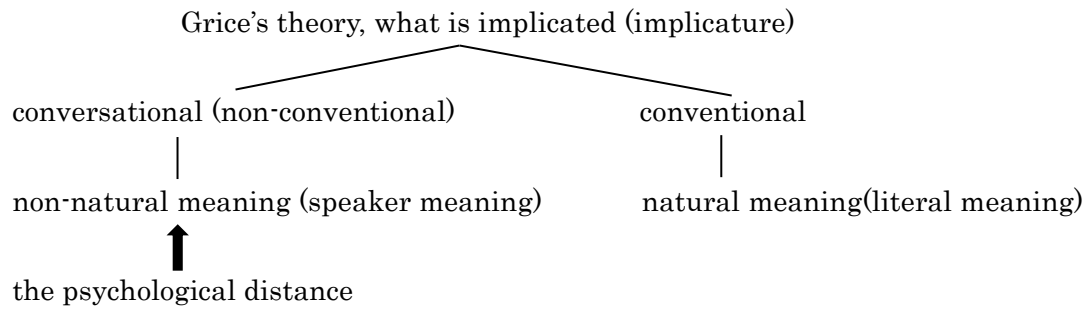
Huang(2007)によると、Grice(1989)は a theory of meaning と a theory of conversational implicature の 2 種類の理論を述べていると書いている。Grice の 2 つの理論を以下(1)にまとめる。

(1)



本研究者は、Grice の理論、特に a theory of conversational implicature と心的距離によって会話は成立していると考え。Grice の理論では、聞き手は話者の発話から話者が何を言いたいのかを推論することが求められる。また、心的距離によって影響を受けた言葉を話者は会話内で用いる。これらのことから、会話は Grice の理論と心的距離によって成立しているということが出来る。以下に Grice の理論と心的距離の関係をまとめた。

(2)



Grice の理論と心的距離が会話を成立させていると上で述べたが、心的距離が文法の語用論的特質の一つであるということを証明するにあたり、韓国語副詞で類義語だと定義されていて、*later* の意味を持っている *ittaga* と *nazunge*、韓国語代名詞で一人称複数の主格と一人称複数の所有格の意味を持っている *uri* を分析した。ただ漠然と *ittaga*、*nazunge*、そして *uri* の分析をするのではなく、日本語・英語と対照しながら研究を進めた。

ittaga と *nazunge* の分析をするにあたって、複数回の内省的調査を韓国語母語話者を対象として行った。調査の結果、この二つの副詞は心的距離によって使い分けが行われていることが明らかになった。

以下に例を挙げる。

(3)

[On the telephone]

Boa: Handal-hu-e jeo-neun ilbon-e galge. Bihaenggi pyo do
one month-after-DAT I-TOPIC Japan-DAT go. airplane ticket too
sa-sseo.
buy-PAST.

“I’m going to Japan one month later. I just bought a plane ticket.”

Juhye: Ppalli bogo sipeo. *Ittaga* ilbon-eseo bwa.
soon meet want. *later* Japan-DAT see you.

“I want to see you soon. See you *later* in Japan.”

(3)の例では、時間的距離は一ヶ月後と遠いのだが、話者と聞き手との心的距離は近く、*ittaga* を用いている。

(4)

Chikwaeuisa: Ije chiryo kkeutna-seupnida.

(Dentist): already treatment complete-PAST.

Naeir-eun bandae jjog-eur ppo baya
tomorrow-TOPIC opposite side-ACC pull-out have-to
dwaeseo naeir do oseyo. Naeir-eun i-reur
so tomorrow again come. tomorrow-TOPIC tooth-ACC

ppobeumyeon neomu apaseo bab-*eur* mos deusir geos gatayo.
pull-out very hurt meal-ACC can have-NEG.
Byeongwon-*e* o-gijeon-*e* mani deusigo oseyo.
hospital-DAT come-before-DAT many eat come.

“I have already completed treatment. I will pull out the opposite side so come here tomorrow again. When you will be pulled out your teeth tomorrow, you will hurt very much and you can not eat. Please have meal very much before coming to the hospital. And please come.”

Juhye: Ne. Geureonde geureohge apeungayo?

I see. but like that hurt Q.

Jigeumdo neomu apeunde naeir do dasi ppobayo?
now very hurt tomorrow too again pull-out Q

“I see. But will I hurt like hurt? I hurt very much now but will you pull out my tooth tomorrow?”

Chikwaeuisa: Ne. Naeir kkog ppobaya doenikka 5si-*e* kkog oseyo.

yes. tomorrow sure pull-out so five-o'clock-DAT sure come.

“Yes. I have to pull out your tooth tomorrow so please come here at 5 o'clock.”

Juhye: Ne. (*ittagalnazunge*) olgeyo.

I see. *later* come.

“I see. I come here *later*.”

(4)の例では、時間的距離は明日で近いが、副詞が修飾する動作が話者にとって、痛みを伴う。よって、話者と副詞が修飾する動作との心的距離が遠い。したがって、*nazunge* が用いられる。

(5)

- *Ittaga*: 話し手と副詞が修飾する動作の心的距離が近い時。
- *Nazunge*: 話し手と副詞が修飾する動作の心的距離が遠い時。

次に、韓国語代名詞 *Uri* は一人称複数の主格と所有格だと定義されている。しかし、定義されているにもかかわらず、実際には異なる使われ方をされている。

(6)

(The speaker Boa and the hearer Yuna are friends. Yuna is older than Boa.)

Boa: *Uri* Yuna-neun eonje bwado yeppeuguna.

(our/my) Yuna-TOP always look cute

“(Our/my) Yuna always looks cute.”

Yuna: Gomawo.

thank you.

“Thanks.”

(6)では、聞き手の名前前で *uri* が用いられている。(6)では、*uri* は定義されている一人称複数の所有格で用いられていない。日本語話者同士の会話では、相手を褒める時に、血縁関係のない相手の名前前に「私の」を付けることはない。しかし、韓国語母語話者は、聞き手である相手に対して相手の名前前に *uri* を用いて、話者が聞き手との心的距離の近さを表すことがある。

(7)

Yoonjin: *Uri* jeonyeok mwo meokeulkka?

we dinner what eat Q

“What will we eat for dinner?”

Hankyu: Paseuta-neun eottae? *Uri* jeonyeok-eul ppalri meokeoseo chulbal

pasta-TOP how about Q. we dinner-ACC quickly eat leave

haeya gessne.

have to.

“How about pasta? We have to eat dinner quickly and leave.”

(7)の例では、*uri* が定義されている一人称複数の主格で用いられている。しかし、(7)で用いられている *uri* が省略されていても文法にも会話にも問題はない。日本語母語話者同士の会話だと、(7)の会話で「私たち」は必要ではない。しかし、韓国母語話者は一人称複数の主格の *uri* を省略できる場面でも用いることで、話者と聞き手との心的距離の近さを表している。心的距離が文法的定義を上書きすると言える。

以上の分析から、心的距離は3種類あるということが判明した。

(8)

- ・ 話者と聞き手の間の心的距離
- ・ 話者とセンテンスの情報の間の心的距離
- ・ 聞き手とセンテンスの情報の間の心的距離

以上の3種類の心的距離と Grice(1989)の a theory of conversational implicature で会話が成り立っていると考えることで、文法的知識、及び Grice による推論の概念を超えた文法的現象の説明が可能となった。

心的距離は、文法の語用論的特質であるダイクシスの一つであると考えられる。

博士論文審査結果の要旨

2016年2月24日9時30分から主任審査委員の立石の司会のもと本学位請求論文の公开发表を質疑も含めて約1時間実施した。約5分間の休憩の後、10時33分から審査委員による口頭試問を、初めの1時間公開で行い、その後非公開で行った後、12時15分に終了した。終了後、審査委員のみにて会議を行い、評価案を決定した。

本論文は、既存の語用論において提唱される言外の意味および語彙選択の道具立てに対し、心的距離(Psychological Distance)という概念を導入することにより、複数の現象の包括的説明を試みたものである。従前より、語用論的現象の説明には、1 Austin (言語行動(Speech Act)理論)、Grice (会話の公理(Axioms of Conversation)理論)、Sperber and Wilson (関連性(Relevance)理論)のように、言語表現の辞書的、あるいは文法的意味はそれとしてあるものとし、その範疇に収まらない意図の理論を構築する試み、および、2 Horn (表意(Explicature)理論)、Kuno (機能統語論(Functional Syntax))、Kamio (情報のなわばり(Territory of Information)理論)のように、大元の言語表現の意味に直接影響を及ぼす道具立てを想定することにより純粋に語用論的(1のような)また統語論的な道具立ての役割を最小限にとどめていこうとする理論の、2つの大きな流れがある。1は主に語彙・表現の含意の説明、2は主に語彙の選択に関わる部分の説明に強みを持っているのが現状であると認識している。本論文においては、心的距離という道具立てが、基本的には上記2の道具立てとして存在しつつ1もカバーするものとして提唱されており、韓国語を軸としつつ日本語・英語との対比を試みている。このような概念の提唱は、当然、オッカムの剃刀的発想を採るとするならば理論的には望ましいが、経験的検証が困難でありあまり見られないものである。本論文はそこに積極的に取り組んでおり、そのような意味では、あまり前例のないものである。そのような点からも、本論文は大変意義深い労作であると言える。

本論文は、7章によって構成されている。第1章および第2章は序章であり、まず第1章では、言外の意味というものがどのように英語を中心とした言語の意味研究において扱われてきているのかを概観し、単に推論(Inference)のみで言外の意味をとらえることでは、文によって表現されているイベント・状態、およびそのイベントの参加者への言及が適切になされないとし、不適切であるとしている。その上で、Kuno (1978)以降機能統語論の分野で名前を変えつつ使用されてきた共感(Empathy)の概念、およびKamioにより提唱された情報のなわばり(Territory of Information)理論を紹介し、言外の意味を正しくとらえるためには、文により表現されている情報、およびその文にまつわる参加者の立ち位置(近接か非近接か)の分析が必要であり、多くの語用論的言語現象がそれ無しでは説明し切れないことを正しく指摘している。第2章においては、Kamioの情報のなわばりの概念(文を構成する要素およびその文全体が表現する情報が、話し手および聞き手の持つ情報のなわばりにそれがあかないかによって、その文法的適正さが左右されるのであるという考え方)を発展させたものとして、心的距離という概念が提唱されている。本論文提出者は、Kunoの理論は、主に個別の指示表現の解釈に関わるものであり、なおかつその指示の拡張(後述の第4章の現象)の説明には不具合が生じること、またKamioの理論は、個別の言語表現の文法性(受容可能であるかどうか)の判断には大変有効な理論であるが、一

方で、同じく指示の拡張および第3章において述べられている副詞の選択については経験的に弱いことを指摘している。心的距離は、Kuno、Kamioのものとは異なり、広義の「言語表現」、話者、および聞き手の三者の間相互で成り立つ概念であるとしている。

第3章および第4章は各論である。第3章においては、一般的に同義語とされている韓国語の時の副詞、ittaga と nazunge (後で、後ほど) が、単なる置き換え可能な同義語ではなく、それを含む言語表現そのものおよびその構成要素の総体が話者および聞き手がそれと持つ心的距離により選択されるものであると指摘している。まず、この2つの表現が、表現されている物事の時間と発話時間の距離で区別されていることを指摘し、その後、この時間的距離の概念は、心的な近接性の有無によって上書きされることを指摘し、心的距離の概念を用いることで分析することに成功している。3回にわたる調査結果と内省による判断がデータとして使用されているが、どれも今まで指摘されていなかったものであり、非常に興味深い。第4章においては、辞書的な意味として「私たち」が一般的に訳語として使われる韓国語の代名詞 uri についての分析を行っており、uri が主に話者にとっての強い心的近接性を表す表現であること、その近接性により本来複数が主解釈である uri が単数の解釈を持つ場合があること、その近接性は話者にとってのものばかりでなく聞き手、情報との近接性も関わることが指摘されている。こちらは主に内省による判断データが採用されている。また、両章において、韓国語を中心としつつ、日本語、英語との対比も試みられている。

第5章は、本論文では主に Grice、Kamio の理論に対する準拠およびその修正を試みているが、それが他の理論との関わりにおいても十分に使用に値するものであることを議論している。第6章においては、英語の時の副詞の分析、指示詞の日韓対照、および韓国語の親族名称について、心的距離の概念を使っての分析の可能性を指摘している。第7章は、論文全体の結論であり、心的距離という概念の正当性を以て結論としている。包括的な概念である心的距離を提唱しているので、所々に経験的・概念的な弱さはあるが、それを検証可能な仮説として立てることに本論文は成功を収めている。さらに、その概念を種々の言語現象に積極的に当てはめ分析を試みる姿勢は、高く評価するべきである。

公開発表会の際、主に、1 「文の情報」という本論文で使用されている用語とより一般的に意味論において使われている「イベント」という概念の関連と評価、2 他のより現代的な語用論の理論、特に関連性理論との整合性、3 三回にわたる調査の数値処理の仕方の適切性、4 韓国語に比して日本語・英語の分析の分量が少なめなので、それについての見解、5 副詞の分析における手法の問題として、時間的距離が際立つ書き方をしているので、それをより心理的距離に換算するような調査方法がなかったか、および、6 ここからの研究の目標と指針、について質問、コメントがあった。いずれにも適切な応答が得られたものと理解している。本論文の欠点およびそれに対する改善の指針についても、健全な方向性が示され、当該分野の研究者としての能力が確認された。

審査委員より下記の問題点が指摘された。1 第3章、第4章の記述的研究に比して第5章の理論的考察の分量が少ないこと、特に関連性理論などとの整合性に対する評価が足りない。2 心的距離という概念が、結果として強い概念となっているので、その批判的評価が必要である。3 第6章において言語横断的研究がなされているが、それがまだ端緒である。4 統計処理の手法に改善の余地がある。大変興味深い結果を活かすような

表現の仕方が望まれる。5 言語横断的分析における先行研究の評価に不足がある。6 他、表現の問題点がまだ見られた。しかしながら、これらは本論文の価値を損ねるものではなく、本人の試問における回答からも、本論文を出発点として、今後十分に独立した研究者として発展出来るものであると判断する。

本論文は、理論横断的、また言語横断的考察において、より深めるべき観点は少なくないが、大変興味深い新たなデータを、新たな理論的道具立てで分析しようと試みたことは高く評価されるべきであり、十分に評価出来るものであると考える。審査委員一同は、本学位請求論文を本学の博士（文学）学位論文としての条件を満たしているもとし、合格と判定する。

2016年2月24日

主査 立石 浩一 教授

副査 松尾 歩 教授

副査 金水 敏 教授

大阪大学大学院文学研究科